

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和4年度学校評価 結果

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

<b>1 前年度 評価結果の概要</b>	・保護者アンケートや児童アンケートの結果は、今年度も概ね良好な評価だった。しかし、新型コロナウイルス感染症予防のため、学校の取組の制限や授業参観の自粛などで保護者や地域の方々へ学校の様子を十分伝えることができなかった。学力向上の面では、学力調査の結果から学年の課題が明確になった。次年度は、その課題を踏まえて全職員による共通理解による共通実践をさらに進め、学力向上を目指したい。心の教育、健康・体づくり、特別支援教育においても、様々な研修の機会を捉えて教師一人一人の指導力を向上させていきたい。さらに、小規模校の特徴を生かして連絡・連携を密に目標達成に向けて全員の力を結集させるとともに、コミュニティ・スクールとして、学校と地域の結びつきを強め、地域全体で子どもたちを育てる機運をより高めていきたい。
<b>2 学校教育目標</b>	夢をもち進んで学ぶ 心やさしい子どもの育成 かしこい子（基礎学力、問題解決力、論理的思考力） やさしい子（思いやり、規範意識、郷土愛） たくましい子（ねばり強さ、礼儀・あいさつ、心身の健康）
<b>3 本年度の重点目標</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆[雄飛学園「めざす15歳の姿」]を目指して、雄飛学園教育を推進する。</li> <li>◆学力向上を図る</li> <li>◆命と人権教育を推進する。</li> <li>◆「雄飛学園メソッド」に基づいた生活習慣や規律ある行動の定着をめざす。</li> <li>◆子どもへのまなざし運動と市民性を育む地域と連携した教育を推進する。</li> </ul>

4 重点取組内容・成果指標				中間評価		5 最終評価				主な担当者	
(1) 共通評価項目											
評価項目	重点取組		具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価			評価
	取組内容	成果指標 (数値目標)		進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言		
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践 (学習内容の定着に向けた、一人一台端末を活用した授業実践)	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師90%以上 ○一人一台端末を使って考えを交流しながら、考えを深めたり広げたりすることができたと回答した児童が80%以上	・教職員間でマイプランを共有する。 ・授業実践により、取組の推進を図る。 ・一人一台端末の活用についてスキルアップを図る研修会を実施する。	B	・学力向上に係る研修会で、学習状況調査の結果分析を行い、児童の課題と重点的に指導する内容について共通理解を図った。 ・課題克服を目指した一人一台端末を使っての実践については、スキルアップを図る研修や資料共有を行っている。すべての職員が、授業の中で1人1台端末を活用している。 ・2学期は、グループ研や全校研もあり、さらに、1人1台端末の活用について研修が深まる。	A	・児童の課題と重点的に指導する内容について共通理解を行い、学力向上対策評価シートに示したマイプランを意識して実践することができた。 ・一人一台端末についてのアンケートでは、「授業の実践や見直しができた。」と回答した職員が80%、児童アンケートでは、「考えを深めたり広げたりすることができた」と回答した児童が85%であった。授業実践や研修を実施したことで、スキルアップを図ることができた。 ・先生ものびるタイムを実施し、ICT支援員や外部講師を招いた職員研修に全職員が積極的に参加することができた。	B	・学習内容の定着に向けた授業実践がねらいである。アンケートの結果から、職員研修を行ったことで授業の実践や見直しができたことや、児童が考えを深めたり広げたりすることができたことは分かったが、内容の定着という点では、課題が見られる。児童一人一人を引きつける授業、一人一人の理解の状況をしっかり把握しフォローする授業を行ってほしい。また、学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師は、90%以上を目標としていたのに対し80%であることから、さらに学力向上への職員の取組を期待したい。		・学殖向上対策Co. ・研究主任 ・指導方法改善担当 ・TT少人数担当
	○学習のきまりを身に付ける教育活動	○久保泉小の学習のきまり4項目を守って学習することができたと回答した児童90%以上	・学習のきまりを周知させる。 ・学びの強化週間を設定し、できている基準を児童に示し、自己評価につなげる。	B	・1学期末に行った学校評価アンケートで、「久保泉小の学習のきまり4項目を守って学習することができた」と回答した児童は89%（126人）。 ・学びの強化週間の状況を職員で振り返り、児童への指導を統一している。学年により差があるため、継続して指導を行う。	B	・2学期末に行った学校評価アンケートでは、「学習のきまりを守って学習することができた」と回答した児童は97%であった。「号令のしかた」「かつおタイム」など、繰り返し指導することで、学習のきまりを意識できる児童が増えた。しかし、実際は、授業の準備ができていなかったり、教室の移動が遅れたりしている姿が見られる。 ・「まなざしカード」の取り組みにより、各学年の家庭学習の時間や内容が向上した。	B	・アンケートの結果だけを見ると、1学期末に比べ2学期は、肯定的な回答が増加し、成果指標を上回る結果となっている。意識は高まったが、実際は、まだ課題が残っているという点で、十分達成できているとは言えない。		・たしかな学び部
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○友達の立場に立って、思いやりのある「ぼかぼか言葉」を使っていると回答した児童が90%以上 ○、どんな友達にも同じような気持ちで話したり関わったりしていると回答した児童が90%以上	・人権・同和教育の視点に立った授業を実施する。 ・授業参観にふれあい道徳を実施する。 ・全校や学年グループ単位で参加体験型の人権教室・集会を年間7回実施する。	B	・5月、6月、7月、10月に人権教室を実施。今後も人権教室を継続し、全校的な取り組みにつなげる。 ・1学期の授業参観で道徳の授業を行った。 ・友達の立場に立って、思いやりのある「ぼかぼか言葉」を使っていると回答した児童が88%（124人）。 ・だれとでも同じような気持ちで話したり関わったりしていると回答した児童が89%（126人）。	B	・「友だちの立場に立って、いつも思いやりのある「ぼかぼか言葉」をつかっている」と回答した児童は90%。「だれとでも同じような気持ちで話したり関わったりしている」と回答した児童が93%と意識がやや高まった。しかし、それを実行に移すことができていないことが課題としてあげられる。 ・コロナ禍でもできる活動を取り入れながら、人権教室や平和集会の実施をすることができた。	B	・道徳教育、人権・同和教育の視点に立った取組を行い、心の教育が進められている。児童の意識の向上は見られるので、友達の立場に立った思いやりのある行動ができる児童が増えるように、今後も取り組んでほしい。		・豊かな心部 ・道徳教育推進教員 ・人権・同和教育担当
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○いじめ防止等（いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対応等）について組織的対応ができていると回答した教員90%以上	・いじめの対応マニュアルを基に職員研修を実施し、体制を共通理解する。 ・なかよしアンケートやいじめアンケートの結果を全職員で共有し、いじめの早期発見と児童の実態把握に努める。 ・いじめを気づいたら、いじめ防止対策委員会を開き、情報を共有し対応する。	B	・いじめについては職員会議や夏季休暇時に職員研修を行った。定義を共通理解すると共に、事例をもとにして具体的な手立てについて考えた。 ・毎月のなかよしアンケートやいじめアンケートの結果を全職員で共有し、全職員で児童へ関わる体制を確認した。 ・1学期末に行ったアンケートでは、「いじめ防止等（いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対応等）について組織的対応ができている」と回答した教員は、85%。 ・機会あるごとに「いじめ」については、小さなことでも「報・連・相」を徹底することを確認する。	A	・2学期のはじめ、3学期のはじめのいじめゼロ宣言は6年生が中心となって行い、いじめについて考える劇やクイズを取り入れていじめ防止を促した。 ・児童の実態やアンケートから認知したいじめ事案や児童の問題行動について全職員で共有した。事案が発生したときは、関係職員で確認し、対応することができた。 ・2学期末に行ったアンケートでは、「いじめ防止等（いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対応等）について組織的対応ができている」と回答した教員は、100%。	A	・学年によって事例の大小はあるが、いじめ事案は起こっている。6月と12月のアンケート結果を比べても、増えている。特に気になる事案はオープンにして、みんなで考えていきたい。いじめられた子、いじめた子それぞれにしっかり向き合って話を聞き、これまで同様、職員がフォローし合って対応してほしい。		・生徒指導担当 ・各担任

	◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	○自分の身近な目標に向かって、努力することができていると思う」と回答した児童90%以上	・キャリアパスポート等を活用し、各学期のめあてを設定する。また、学期の途中や終わりにふりかえりをし、自分自身の成長を確かめる。 ・様々な機会に「出番」「承認」を与える。	A	・学期始めには「めあて」を立て、学期終わりには「めあてを振り返る」ことをそれぞれの学年でしっかり取り組むことができている。 ・1学期末に行った学校評価アンケートで、「自分の身近な目標に向かって、努力することができていると思う」と回答した児童は、92% (130人)。 ・今後の行事の中で、さらに児童に「出番」「承認」を与えられるよう、職員に声を掛けるようにする。	A	・キャリアパスポートの取組は、自分の成長やがんばりを確認できるので、よい取り組みである。 ・「出番」「承認」は、雄飛学園(小中連携)の目標でもあるので、大切にしたい。コロナ禍の中でも工夫して行事を行ったことで、児童の活躍の場が少しでも生み出すことができたことが評価できる。 ・2学期末に行った学校評価アンケートで、「自分の身近な目標に向かって、努力することができていると思う」と回答した児童は、92% (130人)。	A	・雄飛学園の理念を今一度確認したい。「出番」を与え「役割」を果たさせ、出来ても出来なくてもその過程をしっかりと「承認」し、自己承認できるように支援する。それが自己実現につながる。このことを先生も親もPTAも再認識したい。このことが、落ち着いた学級・学校、いじめ防止にもつながると考える。	・特別活動担当
●健康・体づくり	●望ましい生活習慣の形成	○基本的な生活習慣である「早ね早起き」「朝ごはん」「身だしなみ」ができていると回答した児童90%以上	・基本的な生活習慣をチェックするまなざし週間を設定し、親子で生活を振り返る。	C	・1学期末に行った学校評価アンケートで、基本的な生活習慣である「早ね早起き」「朝ごはん」「身だしなみ」ができていると回答した児童は、79% (112名)。	B	・2学期末に行った学校評価アンケートでは、「早寝早起き」「朝ごはん」「身だしなみ」など基本的な生活習慣が身につけていると回答した児童は84%であった。テレビやゲームの時間が長く、就寝時刻が遅い児童も見られるが、「まなざしカード」の取り組みにより、早寝の大切さについて、親子で意識が高まりつつある。	B	・児童に行ったアンケート調査では、肯定的な回答をした児童は、1学期末の79%から84%に増加し、改善している。しかし、成果指標の90%には至っていない。基本的な生活習慣は家庭からではあるが、家庭と連携をとりながら取組を継続し、より一層の改善を図りたい。	○たしかな学び部
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ○見直しをもって業務を進めることができた(スーパー定時退勤日に帰ることができた)と回答した職員90%以上	・長期、短期ごとに業務の内容を見通して計画を立て、可視化する。業務の優先順位と退勤時刻を決め、効率よく業務を進める。 ・月に一度、スーパー定時退勤日を設定する。	C	・1学期末に行った学校評価アンケートで、仕事の進め方を工夫するなど、時間外勤務の削減を意識した取り組みができていると回答した職員は、46%。 ・業務効率化に向けてのアイデアを職員で出し合い、協力して業務が遂行できるようにする。	B	・2学期末に行った学校評価アンケートで、仕事の進め方を工夫するなど、時間外勤務の削減を意識した取り組みができていると回答した職員は、77%。 ・スーパー定時退勤日の設定がなかなかできなかったが、仕事の優先順位を決め、チームで仕事内容を確認したり、退勤時刻の目標を決めたりしながら、実行する職員が増えた。	C	・アンケートの結果から、職員の意識が変わり、工夫をしながら仕事を進めていることがわかった。意識の改善は図られているようだが、退勤時刻の変化はそれほど見られず、少ない人数で抱えている業務の量も多く、状況は厳しい。	○管理職

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標(数値目標)		進捗度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果	評価	意見や提言	
○特別支援教育の充実	○教員の専門性と意識の向上	○特別支援に関する専門性が向上した教員90%以上	・児童支援会議を毎月実施し、支援が必要な児童の共通理解を図る。 ・特別支援教育の職員研修を計画的に実施し、職員一人一人の専門的理解を深める。	B	・1学期末に行った学校評価アンケートで、特別支援に関する自分自身の専門性が向上したと回答した教員は、77%。 ・毎月の児童支援会議で、支援が必要な児童については、状況と7対応を共通理解している。 ・夏休みに研修を行ったが、今後も計画している研修を行い、1人1人の専門的理解やスキルを高めていきたい。	A	・特別支援に関する理解を深め、児童の個性を支援する努力をしていると回答した職員は92%だった。 ・今後も特別支援教育についての研修を深め、児童の困り感に寄り添える形の支援を職員間で考えていきたい。 ・巡回相談や専門家派遣等も必要に応じて活用していきたい。	A	・児童の特性に合わせた支援について、職員で情報共有を図っていることや特別支援教育の職員研修、巡回相談を計画的に実施し、職員一人一人の専門的理解を深めていることは評価できる。今後も児童の特性に応じた対応をお願いしたい。	・特別支援教育Co.
○地域連携	○まなざし運動と市民性を育む教育の充実	○地域の人、もの、ことへの関心が高まった、または、地域のことを再発見したと回答する児童が90%以上 ○地域の人、もの、ことに関わる活動を進めることができたと回答する教職員が90%以上	・総合的な学習の時間のねらいを職員全体で共有し、ふるさとに根ざした学習活動を展開する。 ・学習や行事に地域の人々が積極的に参画できる計画を立てる。地域教育コーディネーターや運営協議会の委員と話し合いの場をもち、情報を共有しながら内容を吟味し、実践する。	B	・総合的な学習の時間は、「ふるさとに根ざした学習活動」を展開することを共有した。 ・地域の方に協力してもらいながら、生活科や総合的な学習の時間に、地域に向かいの体験活動をすすめることができている。 ・1学期末に行った学校評価アンケートで、地域の人、もの、ことへの関心が高まったと回答した児童は85% (120人)。また、地域の「人・団体・施設」と連携した教育活動に取り組んでいると回答した職員は、85%。	B	・2学期末に行った学校評価アンケートで、地域の人、もの、ことへの関心が高まったと回答した児童は88%となっており、地域の人、もの、ことへの関心が高まったと感じている児童が増えたことが分かった。また、地域の「人・団体・施設」と連携した教育活動に取り組んでいると回答した職員は、85%。 ・次年度も総合的な学習の時間のテーマを見直ししながら、より地域と連携した学習計画を考え、工夫しながらすすめていきたい。	B	・コロナ禍ではあったが、学習のサポートや環境整備に地域の方々の協力を得ることができた。学校・学級からの要望を学校運営協議会の中で確認し、サポートの方法を考えて、委員だけでなく地域の方々に広げることができたことで、多くの取組が可能となった。児童の地域の「人」「もの」「こと」への関心を高めることにも、地域の方々にも、学校の様子を知ってもらう機会となった。 ・今後もふるさとに根ざした学習活動ができるよう協力していきたい。	・生活科主任 ・総合的な学習の時間担当

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育

5 総合評価・次年度への展望	・本年度の共通評価項目及び独自評価項目については、1項目を除いて、おおむね良好の結果を得ることができた。昨年度は、新型コロナウイルス感染症予防のため、学校の取組の制限や授業参観の自粛などで保護者や地域の方々へ学校の様子を十分伝えることができなかったが、工夫して行事を行い、保護者や地域の方々に学習の様子を見ていただく機会を増やすことができた。しかし、まだまだ学校での取組や児童の様子や家庭や地域に伝わっていない部分も多い。また、職員の取組が成果として表れていなかったり、意識の向上は見られたが行動が伴っていないかたりする項目もあるため、「学力向上」「心の教育」には、さらに、家庭や地域と連携して取組を進め、課題改善を図ってきたい。また、課題となっている業務改善についても、業務の精選や平準化を行うなど新たに具体的な方策を探ってきたい。
----------------	---